

男鹿半島・大潟ジオパーク現地再審査報告書(公開版)

【日程】2015年11月2日(月)～11月4日(水)

【審査員】

成田 賢(日本ジオパーク委員会委員)

橋詰 潤(日本ジオパーク委員会委員)

原田卓見(アポイ岳ジオパーク)

【主な参加者(所属)】

渡部幸男(男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会会長、男鹿市長)・高橋浩人(同会副会長、大潟村長)・鈴木雅彦(同会委員、男鹿市教育委員会教育長)・北林 強(同会委員、大潟村教育委員会教育長)・目黒重光(同会事務局長、男鹿市教育委員会教育次長)・加藤秋男(同会事務局員、男鹿市教育委員会生涯学習課長)・畠山嘉美(同会事務局員、男鹿市教育委員会生涯学習課ジオパーク推進班長)・進藤智哉(同会事務局員、大潟村干拓博物館学芸員)・五十嵐祐介(同会事務局員、男鹿市教育委員会生涯学習課ジオパーク推進班主任)・渡部公成(同会事務局員、男鹿市教育委員会生涯学習課ジオパーク推進班主事)・白石建雄(同会委員、NPO法人あきた地域資源ネットワーク理事長、秋田大学名誉教授)・小野金弘(同会委員、男鹿半島・大潟ジオパークガイドの会会長)・荒谷光幸(同会委員、サンルーラル大潟支配人)・高橋武松(同会委員、大潟村案内ボランティアの会会長)・佐藤 豊(同会幹事、男鹿市観光協会専務理事)・鏡 啓記(同会幹事、NPO法人あきた地域資源ネットワーク理事)・加賀谷正人(同会幹事、男鹿市立払戸小学校教頭)・田中 司(同会事務局員、大潟村教育次長)・菊地光和(同会事務局員、男鹿市ジオパーク学習センター)・小山田智子(同会事務局員、男鹿市ジオパーク学習センター)・佐々木鶴代(同会事務局員、男鹿市教育委員会生涯学習課生涯学習班長)・森田僚也(大潟村地域おこし協力隊)・柴田 彰(男鹿市教育研究所相談員)・三浦由美子(ガイド、男鹿半島・大潟ジオパークガイドの会会員・男鹿市観光協会)・三浦大介(ガイド、同会会員・男鹿観光ホテル)・佐藤光生(ガイド、同会会員)・澤木博之(ガイド、同会会員)・夏井興一(ガイド、同会会員)・相場 博(ガイド、同会会員)・工藤兼雄(ガイド、大潟村案内ボランティアの会会員)・富田博文(ガイド、同会会員)・鎌田悦子(ガイド、同会会員)・石原敏子(ガイド、同会会員)・堤 朗(大潟の自然を愛する会)・菅原 章(男鹿市商工観光課主幹)・加賀有陽(男鹿市総務課危機管理班主事)・平ノ内亮(大潟村産業建設課)

【見学地点】

男鹿総合観光案内所・男鹿市ジオパーク学習センター・旧船川線防波堤・男鹿のまるきぶね・船川第二船入場防波堤・鹿おとし・鬼の隠れ道・八望台・大潟村干拓記念館・サンルーラル大潟からの展望・大潟富士・八郎潟河川公園・経緯度交差点

【現地審査のまとめ】

1) テーマとジオサイト

認定時に指摘された地質・地形に偏っていたジオストーリーについては、新たに「半島と干拓が育む人と大地の物語」をメインテーマに掲げ、生態や歴史文化を取り込んだジオサイトの再設計が行われている。その結果、地理区分として6つのエリアを設け、22のジオサイトに区分し、6つのキーワードをもとに100のジオスポットを設ける構成となっている。さらに、これらのジオスポットに対しては、7つのジオストーリーで区分している。これまでの地質・地形一辺倒からの脱却が図られるとともに、7つのジオストーリーとの対比した色分けを行い、解説板やパンフレットに反映されている。

この結果、拠点施設や土木遺産、城址史跡、木彫り船等もジオサイトやジオポイントとなっている。これらについての用語の使い分け並びに歴史サイト、文化サイトといった区分に変更検討することを指摘した。ただし、各ポイントは、ジオとの関連性が整理され、区分根拠が明確であることから、用語変更は可能とのことであった。また、拠点施設をジオサイトの範疇に含めているので、除外することが必要である。

また、八郎潟干拓の影響と恩恵についてはジオパーク全体のストーリーに位置付け、日本や世界に発信していくことが求められる。日本の沖積平野には、軟弱な沖積層が分布している場合が多く、軟弱地盤と苦闘して干拓を勧めた歴史を持つ大潟村だからこそ、干拓の歴史を発信できるはずだ。

2) 保全

ジオスポットの保全は、解説板に国立公園エリア内であることや指定文化財であることを明記し、保全を告知している。また、文化財保護法などの法令規制がない部分は、土木遺産などの民間百選などに積極的に応募登録することで保全のインセンティブを働かせているなどユニークな活動も行われている。これに加え、地質遺産として重要なグリーンタフ標準層序模式地については、その保全活動を地域活動としてとらえ、後世にその重要性を地域で共有できる保全活動の推進が求められる。

3) 教育・研究活動

拠点施設としては、男鹿市の分庁舎2階を改修し認定後に新たに開設されたジオパーク学習センターと既存の大潟村干拓博物館の2つがある。ジオパーク学習センターはイラストを活用したわかりやすいパネル展示や標本展示がなされ、2名の解説員が常駐している。館内には、学校教育に対応した学習スペースも設けられており、センター・事務局・教育研究所・学校との連携により充実した教育体験プログラムが展開されているほか、ジオパーク域内の研究文献リストや文献が閲覧できる状況になっている。また、干拓博物館は入り口付近に新たにジオパークコーナーが設けられ、八郎潟の生い立ちや地層の剥ぎ取り標本などが展示されている。大潟村には、温泉ボーリング試料や干拓時の調査ボーリング試料があることから、男鹿半島に分布する地層が大潟村の深部に存在することを示す展示を推奨した。

ガイドブックなどの刊行物もエリアの魅力を包括したさまざまな形態のものが整備され、特に、秋田県内のジオパークも含めた広域的な刊行物が多くつくられている。

日本海中部地震による津波被害については、ジオパーク学習センターにおけるパネル展示や被害があった場所への説明板が整備されており、これらを活用した学校での積極的な防災

教育が行われている。

研究活動は、秋田県内ジオパークの広域連携組織である「秋田県ジオパーク連絡協議会」による研究助成事業が行われ、ジオパークの基礎研究支援が進められており、その実績を積み重ね始めている。

4) 管理組織・運営体制

事務局体制は、男鹿市・大潟村ともに教育委員会生涯学習課が担い、月 1 回の定例会議をはじめとした双方の密接な連携により事業展開が図られている。また、男鹿市、大潟村の首長のジオパーク推進への熱意は高く、議会の理解を得たなかでの安定的予算配分が行われている。また、地域への浸透も進んでいる。

当ジオパークでは、「秋田県ジオパーク連絡協議会」の設立を主導し、その中に県内全体をカバーする秋田大学を中心として学術サポート組織を置くなど、運営の広域化も図っている。NPO あきた地域資源ネットワークが管理していたホームページは 2012 年に公式ページとして開設されているが、見直したジオサイトなどの反映を含めた大幅リニューアルが 2016 年に予定されている。男鹿市と大潟村は、一つのジオパークとしての連携が進んでいるが、拠点施設やガイド団体がそれぞれにあり一体化を図る余地は残っているが、お互いに連携協力した状況が伺われた。今後は、ジオパーク全体のジオストーリーを学び楽しむような市民・村民向けの学習会やツアーを行うことなどにより、より一体化を進めていく必要がある。

5) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

教育旅行による集客や認定ガイドへの依頼増など、観光への波及も現れているが、ジオツーリズムは緒に就いたばかりという印象を受ける。温泉や国定公園など既存の観光需要の上に、ジオツーリズムによる新たな需要を付加することが求められるなかで、旅行業者の資格を持つ男鹿市観光協会との協力事業も開始された状況である。今後のさらなる展開を期待する。

拠点施設へは陸路となるが、本ジオパークを初めて訪れる個人客でも、2つの拠点施設を起点に各ジオサイトへスムーズに行けるような導線の明確化と、ホームページやパンフレット等への詳細な場所の掲載や標識などの誘導情報の整備が求められる。拠点施設の一つである男鹿市ジオパーク学習センターは、男鹿市若美総合支所の 2 階に設置されており、その名のとおり学習機能に重点を置いた拠点施設だが、より学習目的以外の観光客などのビジターが入りやすいような改善が望まれる。

域内のホテルや菓子店では、ジオパークをモチーフにした料理やお菓子がつくられるなど、ジオパークを活用する動きで出始めている。レストランで提供されているジオメニューの評判が良いとのことであり、今後の展開に期待したい。

ガイドは、2014 年に設立されたジオパークガイドの会と 2002 年から活動している大潟村案内ボランティアの会が認定ガイドとして活動している。いずれも独自の運用システムがあり、事務局との連携によりスムーズな受入態勢がとられている。特に、ジオパークガイドの会では、とかく理解が難しい地質の話を各ガイドそれぞれが手づくりのアイテムを使って分かりやすく紹介しようと努力を重ねており、大変わかりやすいガイド活動に取り組んでいる。事務局によるガイド養成システムも整備され、2年間で 28 名のガイドが誕生し、今年もさらに 11 名が受講している。なお、認定ガイドには、独自に制定したガイドとしての遵守事項を

まとめた「ガイド憲章」の携帯と遵守が義務付けられている。

6) 国際対応

新しく設置された解説板には、テキスト部分も含めて英語が併記されているが、マップやガイドブック、ホームページの外国語対応には、まだ至っていない。外国客の需要が見込まれるのであれば、それらへの外国語対応も望まれる。

7) 防災・安全

海岸沿いや崖地の解説板には、露頭での落石注意勧告や津波警戒のための標高表示が明記されている。また、スマートフォン用地図アプリを使った津波ハザードマップも整備されている。そのほか、ジオパーク学習センターでコーディネートする学校教育の野外授業では、事前に現地確認を行った後、現地に案内する体制をとっている。また、認定ガイドにおいても、自ら制定した憲章の中で危険箇所での注意喚起をうたい、救急救命講座の受講、賠償責任保険の加入、依頼者との事前打合せなど、危機管理の徹底が図られている。

8) 結論

日本ジオパーク認定審査（2011年）での指摘事項について、なお取組みを進めるべき要素はあるものの、上述のように認定時の指摘事項についてはおおむね改善されており、それ以外の課題についても解決していくための体制や意思が認められた。また、学校教育、地域教育に積極的にジオパーク活動を位置付け成果を挙げているほか、他のジオパークとの積極的な連携を進めるなど、この4年間の成果は大きいと評価する。このような取組みは、日本ジオパークとしてのさらなる発展に期待がもてることから、現地審査員の総意として男鹿半島・大潟ジオパークを日本ジオパークとして再認定すべきと判断する。

以上